

# 『色彩の変奏』

～光と塵への挽歌～



- 悟：**（カフェのざわめきを切るように、静かな声で）あの光を見てごらん、エレシヤ。あの落ち方……まるで何か穏やかな抱擁のようじゃないか？ あの陽射しの中に、何か癒しの力を感じないかい？
- ミン：**（コード入力の手を止め、光るキーボードの上で指を宙に浮かせ、悟に顔を向けながら、かすかに微笑む）癒し？ ええ、まさにその通りね。太陽がこんなふうに絶妙な加減で差し込むとき、それはまるで魔法みたい。正直、今すぐこのコードなんて放り出して、この金色の光の中に身を投げ出して休みたいくらいだわ。
- ティン：**（湯気の立つマグを「カチッ」と音を立てて置き、暗い瞳で思索に沈みながら）ちょっと考えてみてよ。一体どれくらいの人が、実際に太陽や風、大地を“感じる”ほど立ち止まることがあるっていうの？ ほとんどの人は、空調とWi-Fiに満たされた箱の中で目をスクリーンに縫い付けたまま、あるいは書類に埋もれたまま、慌ただしく生きているだけだ。陽光はときどき、私たちの意識の窓をそっと叩く。けれどたいていの場合、その音は無視される。
- ティム：**（ゆっくりとうなずきながら、テーブル上のコーヒーの輪を指でなぞり、まるで隠された文字を読み解くように）まったくだ。私たちの「現代的な」生活は、どこまでも機械的で、せわしく、無意識の習慣に支配されている。企業や政府の指導者たちは、私たちをどれだけ容易に動かせるかを熟知している。サイバネティックな誘惑と、めまぐるしく押し寄せる情報の洪水に晒され、もはや太陽の光について考える暇さえない。私たちは“気をそらすこと”に中毒していて、こうした静けさのひとつときは、むしろ奇妙に感じられるんだ。

- T Newfields (和訳: Akimiとwandererと吉田典子)

開始: 2011年 東京都 完成: 2025年 静岡市